# ガラスの山のお姫さま　ノルウェー

昔むかし、ひとりの男がいました。男は、丘の上に牧場を持っていました。

ところが、去年もその前の年も、草が青々としげるころ、聖ヨハネのお祭りの晩になると、牧場の草が一本残らず食べられてしまうのでした。男は、三人の息子たちにいいました。

「今年の聖ヨハネのお祭りの晩は、牧場の干し草小屋に泊まって、だれが牧場の草を根こそぎ食べてしまうのか、見張ってくれないか」

そこで、いちばん上の息子が、牧場へ見張りに行くことになりました。夕方になると、息子は、出かけて行きました。干し草小屋の中で横になって休んでいると、壁や屋根が、地震のようにガタガタゆれだしました。息子は、びっくりして飛びあがり、あとも見ずに逃げて帰りました。それで、その年も、草をぜんぶ食べられてしまいました。

つぎの年は、二番目の息子が、牧場へ見張りに行きました。息子が、干し草小屋で横になっていると、小屋中がガタガタとゆれだしました。息子は、びっくりして、いちもくさんに走って帰りました。

そのつぎの年、末の息子の番になりました。末の息子は、名前をブーツといいました。ブーツが出かけようとすると、ふたりの兄さんが笑っていいました。

「おまえなんか、干し草の見張り番にちょうどいい。いつも、かまどの灰の中でくすぶっているんだものなあ」

ブーツは、そんなことは気にもかけず、夕方になると、牧場へ出かけて行きました。そして、干し草小屋で横になりました。でも、一時間も経たないうちに、小屋がガタガタゆれだしました。

「これ以上ひどくならなけりゃ大丈夫だ」と、ブーツはつぶやきました。

少しすると、小屋はもっとひどくゆれて、干し草が、ブーツの耳をかすめて飛び回りました。

「わあ。でも、これ以上ひどくならなけりゃ大丈夫だ」と、ブーツはいいました。

ところが、まもなく、もっとひどい揺れが来て、壁や屋根がブーツの頭の上に落っこちてきそうになりました。けれども、それがやむと、あたりはしいんとなりました。ブーツは、

「また来るぞ。ようし」と身がまえて待ちました。けれども、もう二度と揺れは来ませんでした。ブーツは、うとうとと眠ってしまいました。

ふと目を覚ますと、戸口のむこうで、馬が草を食べているような音がしました。ブーツは、戸口にしのびよって、すきまからのぞきました。すると、ブーツが見たこともないほど、大きなす

ばらしい馬が草を食べていました。そして、側(そば)には、くらと手綱(たづな)と、騎士(きし)のよろいがひとそろえ置いてありました。どれも真鍮(しんちゅう)でできていて、きらきらと輝いていました。

「やあ。おまえだったのか。うちの草を食べるやつは。すぐにやめさせてやる」

ブーツは、すぐさま火口箱から火打ち金(がね)をとり出して、馬の背中越しに投げました。すると、馬はその場を動く力がなくなって、おとなしくなりました。そこで、ブーツは、馬に飛び乗り、だれにも知られないところに連れて行って隠しました。

ブーツが家に帰って来ると、兄さんたちが、笑って、どんなふうだったかたずねました。

「牧場までは行けても、小屋では寝てられなかっただろ」

ブーツは答えました。

「ぼくは、日が昇るまで寝ていたよ。何も見なかったし、何も聞かなかった。兄さんたちがどうしてそんなに恐がったのか、ぼく、わからないなあ」

兄さんたちは、

「そうかい。でも、牧場を見ればわかるさ」といって、牧場へ出かけて行きました。ところが行ってみると、牧草は昨夜と同じように青々と茂っていました。

つぎの年の聖ヨハネのお祭りの前の晩、同じことが起こりました。兄さんたちは、ふたりとも、干し草小屋へ行きたがりませんでしたが、ブーツは出かけて行きました。はじめに小屋がガタガタ揺れ、それからもっとひどく揺れ、三度目には去年よりもっと激しく揺れました。そして突然静かになって、戸口のむこうで、馬が草を食べているような音がしました。ブーツは、戸口にしのびよって、すきまからのぞきました。すると、何が見えたと思いますか？一頭の馬が力いっぱい草をかんでいました。それは去年の馬よりもっと大きくてりっぱで、背中に銀のくらをつけ、首には銀の手綱をつけていました。そばには銀のよろいが置いてありました。どれも、だれもが一目でも見たいと思うほどすてきでした。

「やあ。おまえだったのか。うちの草を食べるやつは。すぐにやめさせてやる」

ブーツは、すぐさま火口箱から火打ち金をとり出して、馬のたてがみ越しに投げました。すると、馬は、ひつじのようにおとなしくなりました。そこで、ブーツは馬に飛び乗り、去年の馬を隠してあるところに隠しました。それから、家に帰りました。

兄さんたちが、

「今年も草が青々と茂ってるっていうんだろうな」といいました。

「そうだよ」と、ブーツが答えると、兄さんたちは牧場へ走っていきました。そこには、牧草が深

く茂っていました。

そのつぎの年も、兄さんたちは、やっぱり牧場に行こうとしませんでした。けれども、ブーツは、元気に出かけて行きました。今度も前と同じことが起こりました。小屋はガタガタ揺れはじめ、それからもっとひどく揺れ、三度目には去年よりもっと激しく揺れて、ブーツはまるで踊っているように壁から壁へとぶつかりました。そして突然静かになって、戸口のむこうで、何かが草を食べているような音がしました。ブーツは、戸口にしのびよって、すきまからのぞきました。すると、今までよりずっとずっと大きくてりっぱな馬が草を食べていました。背中に金のくらをつけ、首には金の手綱をつけていました。そばには金のよろいが置いてありました。

「やあ。おまえだったのか。うちの草を食べるやつは。すぐにやめさせてやる」ブーツはすぐさま火口箱から火打ち金をとり出して、馬の首越しに投げました。そのとたん、馬は大地に釘付けになったように動けなくなりました。ブーツは、馬に飛び乗り、他の二頭を隠してあるところまで連れて行きました。それから家に帰りました。

兄さんたちは、またまたブーツをからかって、おまえは夢の中で牧場を見張ってたんじゃないかといいました。ブーツは、自分で見て来ればいいというだけでした。兄さんたちが牧場に行ってみると、今度も草が青々と茂っていました。

さて、この国の王さまには、お姫さまがひとりありました。あるとき、王さまは、ガラスの山に登ることができた者があれば、お姫さまと結婚させようというおふれを出しました。というのは、王さまのお城の近くに、氷のようになめらかなつるつるした、たいそう高いガラスの山がありました。その山のてっぺんにお姫さまが金のりんごを三つ、ひざに置いて座り、その山をかけあがって、りんごを三つとも取ってきた者に、王国の半分をあたえ、お姫さまと結婚させようというのです。

王さまは、おふれを国じゅうの教会の前に貼り、近くの国々にも知らせました。お姫さまは、とても愛らしかったので、お姫さまを見た者は、だれもかれも、お姫さまを好きになりました。そこで、たくさんの王子や騎士たちが、お姫さまと王国の半分を勝ち取りたいと考えました。みんな、すてきな馬に乗り、きらきらした服を着て、われこそはと、出かける準備にかかりました。

約束の日になると、ガラスの山のふもとに、世界じゅうの王子や騎士たちが集まってきました。そして、だれがお姫さまを勝ち取るか見ようと思って、国じゅうの人が集まってきました。

ふたりの兄さんたちも見物に出かけましたが、兄さんたちはブーツに、ついてこないようにと

いいました。
「きたない灰まみれのおまえが来たら、おれたちがはずかしいからな」
「いいさ。ぼくはひとりでだって行けるし、兄さんたちの世話にはならないよ」と、ブーツは答えました。
兄さんたちがガラスの山に着いたとき、王子や騎士たちは、馬で山をかけ登ろうと力をふりしぼっているところでした。けれども、山はガラス板のようにすべすべで壁のように切り立っていました。みんな少し登ってはすべり落ち、少し登ってはすべり落ち、だれもてっぺんまで登ることができません。そのうち、馬たちが疲れはてて、一足も登れなくなってしまいました。
王さまは、今日はあきらめて、また明日やってみようと考えました。そのとき、ひとりの騎士がやって来ました。騎士は、だれも見たことがないようなりっぱな馬に乗っていました。お日さまのようにかがやく真鍮のくらにまたがり、真鍮の手綱をもち、真鍮のよろいを身につけていました。周りの人たちは、どうせむりだからやめろとさけびましたが、騎士は、目もくれず、馬を走らせてガラスの山を登りました。けれども、三分の一まで登ったとき、くるりと馬の向きを変えて下りて行きました。お姫さまは、騎士がとてもりっぱだったので、残念に思って、金のりんごを投げました。りんごは、転がって、騎士のくつの中入りました。騎士は、そのまま、あっというまに馬を飛ばして行ってしまいました。
その夜、王さまは、王子や騎士たちに、金のりんごを取った者は差し出すようにといいましたが、りんごを出して見せるものは、だれもいませんでした。
ふたりの兄さんは、家に帰ると、ブーツにいいました。
「すごかったよ。たくさんの王子や騎士が挑戦したけど、はじめは、ガラスの山に登れる者はだれもいなかったんだ。でも、最後に、真鍮のよろいを着たりっぱな騎士が、真鍮のくらと真鍮の手綱をつけた馬で走ってきて、三分の一まで登って引き返していったんだ」
ブーツは、暖炉（だんろ）のそばに座って足を灰の中につっこんだままいいました。
「へえ。ぼくも見たかったなあ」
兄さんたちは、
「おまえがか？そんなきたない灰だらけのくせに」といって笑いました。
つぎの日、兄さんたちはまたガラスの山へでかけました。今度はブーツもいきたいといいましたが、兄さんたちは、
「きたない灰まみれのおまえが来たら、おれたちがはずかしいからな」といって、ふたりだけで行

ってしまいました。

「いいさ。ぼくはひとりでだって行けるし、兄さんたちの世話にはならないよ」と、ブーツはいいました。

兄さんたちがガラスの山に着くと、王子や騎士たちが山をかけ登ろうと力をふりしぼっているところでした。けれども、山はガラス板のようにすべすべで壁のように切り立っています。みんな少し登ってはすべり落ち、少し登ってはすべり落ち、だれもてっぺんまで登ることができません。そのうち、馬たちが疲れはてて、一足も登れなくなってしまいました。

王さまが、また明日やってみようと思ったとき、昨日の真鍮の騎士よりもっとりっぱな馬に乗った騎士があらわれました。お日さまのようにきらきらかがやく銀のくらにまたがり、銀の手綱をもち、銀のよろいを身につけていました。周りの人たちは、どうせむりだからやめろとさけびましたが、騎士は、目もくれず、馬を走らせてガラスの山を登りました。けれども、三分の二まで登ったとき、くるりと馬の向きを変えて下りて行きました。お姫さまは、騎士に向かって、金のりんごを投げました。りんごは、転がって、騎士のくつの中入りました。騎士は、あっというまに馬を飛ばして行ってしまいました。

ふたりの兄さんは、家に帰ると、ブーツにいいました。

「今日は、銀のよろいを着たりっぱな騎士が、銀のくらと銀の手綱をつけた馬で走ってきて、三分の二まで登って引き返していったんだ」

「へえ。ぼくも見たかったなあ」

「おまえがか？そんなきたない灰だらけのくせに」

三日目も同じことになりました。兄さんたちは、ブーツを家に残して出かけました。ガラスの山に着くと、王子や騎士たちが山をかけ登ろうと力をふりしぼっているところでした。けれども、山はガラス板のようにすべすべで壁のように切り立っていました。みんな少し登ってはすべり落ち、少し登ってはすべり落ち、だれもてっぺんまで登ることができません。そのうち、馬たちが疲れはてて、一足も登れなくなってしまいました。みんなは、きのうの銀の騎士がやって来ないかと待ちましたがやって来ません。ところが、しまいにひとりの騎士が、見たこともないようなりっぱな馬に乗って走ってきました。金のくらにまたがり、金の手綱を持ち、金のよろいを身に着けていました。あんまり美しくきらきらきらとかがやいていたので、周りの人たちは、あっけにとられてながめるばかりでした。金の騎士は、かるがるとガラスの山のてっぺんまでかけ上がりました。そして、お姫さまのひざから、三つ目の金のりんごを取るやいなや、くるりと馬の向きを変えて下

りて行き、全速力で走り去りました。
兄さんたちは、家に帰ると、ブーツに、このすばらしい金の騎士の話をしました。
「今日は、金のよろいを着たりっぱな騎士が、金のくらと金の手綱を付けた馬で走って来たんだ。そして、ガラスの山のてっぺんまで登って、お姫さまのひざから金のりんごを取ったよ。世界広しといえども、あれほどすばらしい乗り手はいないよ」
「へえ。ぼくも見たかったなあ」
「おまえがか？そんなきたない灰だらけのくせに」
つぎの日、王さまは、すべての王子と騎士たちを集めて、金のりんごを取った者は差し出すようにといいました。けれども、りんごを出して見せるものは、だれもいませんでした。
「それにしても、だれかがりんごを取ったはずじゃ。みなこの目で見たのだから」
王さまはそういって、国じゅうの男たちをお城に集めるように命令しました。
男たちは続々とお城にやって来ました。けれども、金のりんごを持っているものはだれもいませんでした。最後に、ブーツの兄さんたちがやって来ました。王さまは、兄さんたちに、他にもうだれもいないのかとたずねました。兄さんたちは、
「弟がひとりおりますが、あいつが金のりんごを持っているはずがありません。この三日間、いろりの灰の中にすっこんでるんですから」と答えました。王さまは、
「かまわん。そいつも連れて来い」と命じました。
ブーツがお城にやって来ました。王さまは、
「おまえは、金のりんごを持っているかね」とたずねました。
「ええ、持っています。これがひとつ目のりんご、これがふたつ目、これが三つ目のりんごです」
ブーツはそういって、りんごをポケットから取り出しました。そして、灰色のぼろを脱いで、かがやく金のよろいの姿（すがた）になりました。王さまは、
「よろしい。おまえに国の半分をあたえ、姫との結婚をゆるそう」といいました。
それから、結婚式がにぎやかに行われました。みんなは、ガラスの山には登ることができませんでしたが、楽しくお祝いすることはできました。もしまだ終わっていなければ、いまでもにぎやかにやっていることでしょう。

村上郁再話

資料『POPULAR TALES FROM THE NORSE』GEORGE WEBBE DASENT